4. 非金銭的損失の算定に係る本格調査の実施

(1) プレ調査からの改良点

本格調査では、プレ調査での調査実施経験を踏まえ、調査の内容を分かりやすくすることや、回答者や調査員の負担を軽減させること等を目的として、以下の諸点を改良した。

1) 負傷区分

プレ調査では死傷の種類を13種類尋ねたが、本格調査での負傷対象は、Q、W、E、R、Y、I、O、A、これに死亡Kと健康Jを加え、10種類に集約した。負傷Oと負傷Pは統合し、負傷Oに一本化した。

<table>
<tr><th colspan="3" rowspan="3"></th><th colspan="6">傷害度</th><th rowspan="3">死亡K</th></tr>
<tr><th colspan="2">①</th><th>②</th><th colspan="2">③</th><th>ー</th></tr>
<tr><th>1</th><th>2</th><th>3</th><th>4</th><th>5</th><th>6</th></tr>
<tr><td rowspan="14">後遺症</td><td rowspan="3">①</td><td>1</td><td></td><td></td><td></td><td colspan="2">負傷Q</td><td rowspan="14">死亡K
と同等</td><td></td></tr>
<tr><td>2</td><td></td><td></td><td></td><td colspan="2" rowspan="2">負傷W</td></tr>
<tr><td>3</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="3">②</td><td>4</td><td></td><td></td><td></td><td colspan="2" rowspan="3">負傷E</td></tr>
<tr><td>5</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>6</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="3">③</td><td>7</td><td colspan="2" rowspan="3">負傷I</td><td rowspan="3">負傷Y</td><td colspan="2" rowspan="3">負傷R</td></tr>
<tr><td>8</td></tr>
<tr><td>9</td></tr>
<tr><td rowspan="3">④</td><td>10</td><td colspan="2" rowspan="5">負傷O</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>11</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>12</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="2">⑤</td><td>13</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>14</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td colspan="3">後遺症なし</td><td colspan="2">負傷A</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2">健康J</td><td colspan="7"></td></tr>
</table>

図 12　本格調査における負傷区分

2) 調査パターン

交通事故で瀕死の状態に陥ったときに、成功すればすぐに完治する可能性のある「特別な治療を受けるための保険」へのWTPは、あらゆる負傷損失額計算の基準となるものなので、すべての調査パターンで尋ねることとした。

他方、調査時間を短縮するため、負傷からの快復についてのWTPを聴取するグループと、負傷から快復するための治療法を受けても良いと考える成功確率を聴取するグループとは、完全に2つに分けた。

また、プレ調査から以下の諸点を変更した。

・重度と軽度の境界に位置する負傷Yは、CV法でもSG法でも尋ねることとした。
・負傷カードを尋ねる順序は、重度→軽度、軽度→重度の2パターンとした。
・全快ケースと後遺快復ケースを尋ねる順序は、全快→後遺快復の順で一本化した。

<table>
<tr><th colspan="2"></th><th>RS法</th><th>CV法</th><th>SG法</th></tr>
<tr><td colspan="2">死亡K</td><td rowspan="5">死亡・健康を含む全ての負傷区分</td><td>確率的CV法</td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="3">負傷</td><td>Q/W/E/R</td><td></td><td rowspan="2">SG法</td></tr>
<tr><td>Y</td><td rowspan="2">確定的CV法</td></tr>
<tr><td>I/O/P/A</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2">健康J</td><td></td><td></td></tr>
</table>

図 13　本格調査での実施パターン（負傷区分と調査手法の対応）

3) 調査票

i) 負傷カード

負傷カードについては、プレ調査と同様に3枚一組の構成としたが、以下の諸点を変更した。

・文字フォントを全体的に大きくした。
・写真は、1枚目の説明文欄にのみ、小さく掲載した。
・説明文は、簡略化した文章に変更した。
・特別な治療法の種類を表す「A」、「B」は、負傷カードの「A」などの記号と混同しやすいとの指摘を受けたので、「特別な治療法（全快）」、「特別な治療法（後遺症のみ快復）」等と表現することとした。

ii) 負傷の順序付けに関する調査

プレ調査からは、以下の諸点を変更した。

・分かりにくいとの回答が多かった点数付けの調査はやめ、順序付け（ランキング）のみの調査とした。
・ランキングに使った負傷カードごとに、「入院中（重傷度）」と「退院後（後遺症）」のつらさの比率を尋ねた。これは、死傷からの快復に対するWTP（CV法にて把握）や、負傷から快復するための治療法を受けても良いと考える成功確率（SG法にて把握）を「重傷度」と「後遺症」に分解する際の参考とするためである。なお、CV法やSG法でも「後遺症のみ快復」させる場合のWTPや成功確率を尋ねることとした。

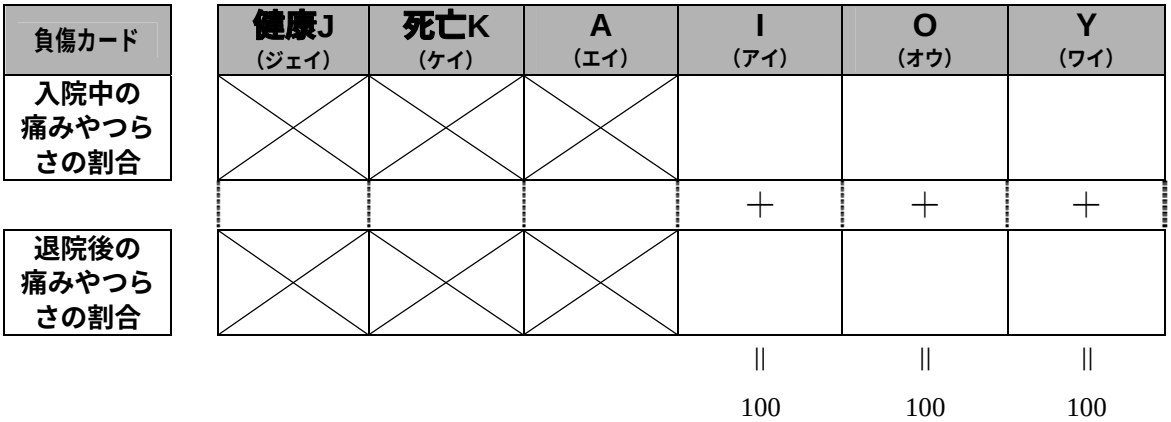

図 14　「入院中（重傷度）」と「退院後（後遺症）」のつらさの按分質問の例

iii) 確率的CV法におけるWTPの質問

プレ調査では、一段階目の最高提示額10,000円については回答者の60％以上が「はい」と回答し、二段階目の最高提示額20,000円において約50％が「はい」と回答する結果が得られた。そのため、本格調査では最大提示額をさらに高くすることとし、提示額を以下のように変更した。

100円、1,000円、5,000円、10,000円、30,000円、50,000円、100,000円

また、死亡リスクの削減幅を尋ねる順序については、プレ調査で順序バイアスが認められなかったことから、本格調査では、25％、50％の順序で一本化した。

調査票の冒頭で、質問全体の構造や特別な保険と特別な治療法の関係などを、クリップアート等を用いて示した。

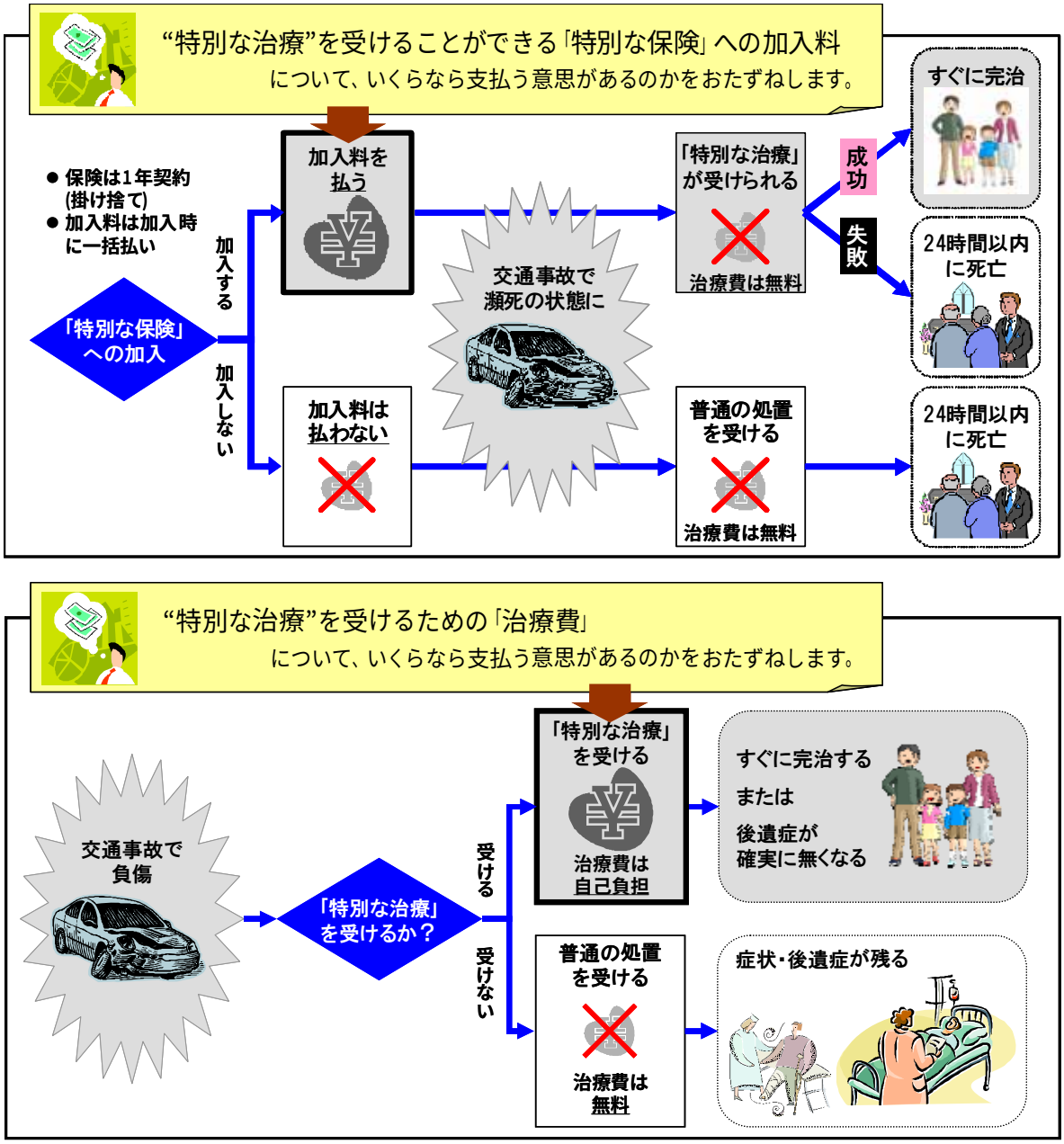

図 15　調査設定条件の図示（保険加入料・特別な治療費）の例

iv) SG法における成功確率に関する質問

調査票の冒頭で、質問全体の構造や特別な治療法が成功・失敗する場合分けなどを、クリップアート等を用いて示すこととした。

また、2問目で、後遺症のみを快復させる可能性がある特別な治療法を受けるには、全快となる可能性がある特別な治療法を受ける場合よりも、成功確率が何パーセント増えればよいかを問う形式とした。

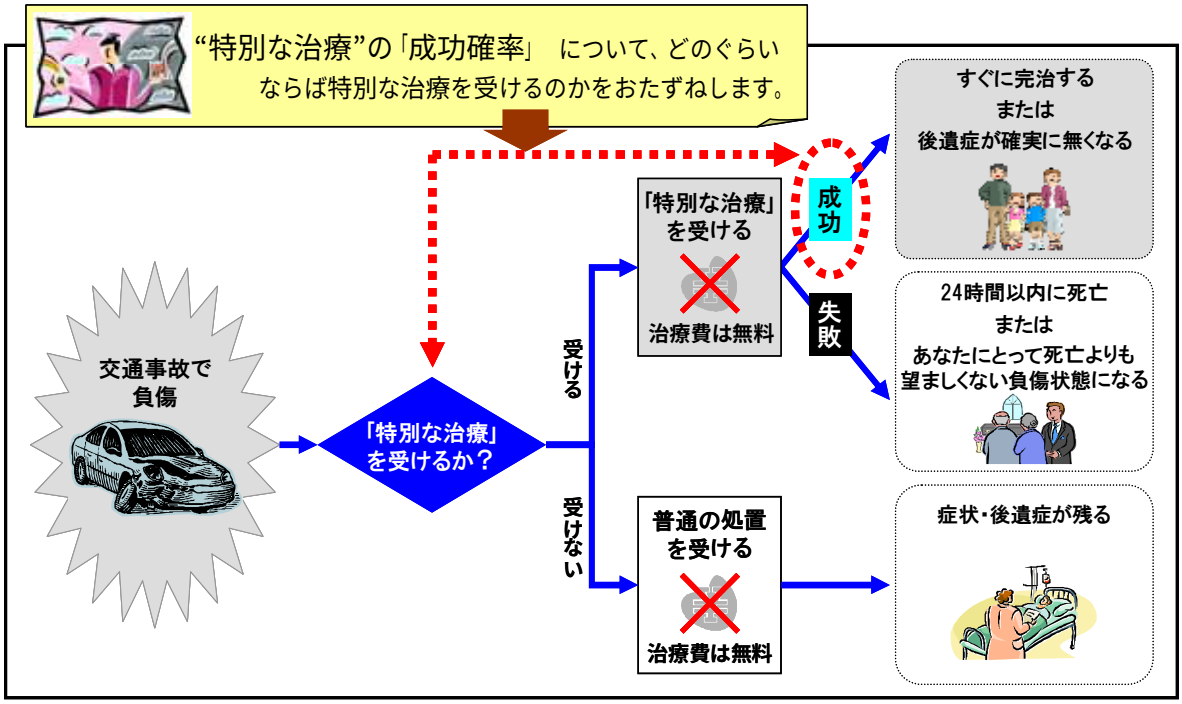

図 16　調査設定条件の図示（特別な治療法を受けても良いと考える成功確率）の例

v) 確定的CV法におけるWTPの質問

負傷の種類別特別な治療法に対するWTPを尋ねる場合、以下の通り見易さを向上させた。

- 負傷カードは常に右ページに配置した。
- 質問は、左側のページで普通の処置と特別な治療法の相違を示し、右側のページで特別な治療法に対するWTPを尋ねる形式とした。
- 特別な治療法（全快）へのWTPを尋ねる時は上段、特別な治療法（後遺症のみ快復）について尋ねる時は下段を用い、治療法の違いを回答者に認識できるようにした。
- 負傷ごとに、上記のプロセスを繰り返すこととした。

(2) 回答者属性の分析結果

ここでは、回答者の属性に係る結果を示す。非金銭的損失に係る結果は後述する。

1) 性別

アンケート回答者の男女比を表 30に示す。母集団である日本人口全体の男女比と比較すると、アンケート回答者の方が男性の比率が若干高いものの、いずれも概ね男女比は1対1となっており、母集団と比べて回答者の男女比に大きな偏りはないと考えられる。

表 30　男女の割合の比較

性別	回答者（%）	母集団（%）
男性	51.0	48.1
女性	49.0	51.9

資料）標本はアンケート調査、母集団は国勢調査（平成22年国勢調査抽出速報集計（総務省統計局）、20歳以上の男女について集計）から算定

2) 年齢

アンケート回答者の年齢構成を表 31に示す。母集団と比較すると、アンケート回答者の方が、20歳代の比率が3%程度少なく、40歳代及び50歳代は3%程度多くなっているものの、全体的には概ね類似した構成比となっており、アンケート回答者の年齢構成についても、顕著な偏りはないと考えられる。

表 31　年齢構成の比較

年代	回答者（%）	母集団（%）
20歳代	10.3	13.5
30歳代	17.6	17.2
40歳代	18.5	16.0
50歳代	18.9	15.6
60歳代以上	34.7	37.7

資料）標本はアンケート調査、母集団は国勢調査（平成22年国勢調査抽出速報集計（総務省統計局）より、20歳以上の年齢構成を集計）から算定

3) 世帯年収

アンケート回答者の世帯年収構成を表 32に示す。母集団と比べて概ね類似した世帯年収分布となっている。ただし、アンケート回答者は個人単位の構成比であり、住宅・土地統計調査では世帯単位の構成比となっている。

表 32　世帯年収分布の比較

年収	回答者（%）	母集団（%）
～5百万円	58.6	57.6
～1千万円	27.8	28.6
～1.5千万円	4.1	5.2
～2千万円	1.1	1.1
2千万円以上	2.0	0.7
無回答	6.4	-
不詳	-	6.8

資料）標本はアンケート調査、母集団は平成20年住宅・土地統計調査から算定